

Oscar Wilde とジャーナリズム *

－ *The Woman's World* 編集によるジェンダー・イデオロギー解体への志向－

梅 津 義 宣 **

Oscar Wilde and Journalism : For the Emancipation of Women
from Gender Ideology through his Editing *The Woman's World*

Yoshinobu Umetsu

Abstract

The aim of this study is to analyze the keynote of this magazine ; the emancipation of women from gender ideology (*i.e.* the right of women to equality of treatment with men). This study also indicates Oscar Wilde's critical and comprehensive assertions about the ideas of women's rights such as social position, education, employment, political aspiration and so on.

Key Words

emancipation of women, fin de siècle journalism, gender ideology, Oscar Wilde, *The Woman's World*

I. はじめに

雑誌類刊行の氾濫という現象に限っていえば、イギリス 19 世紀末は、まさに、ジャーナリズムの時代であった。*The Nineteenth Century*, *The Westminster Review*, *The Fortnightly Review* などの主流派の位置を占める雑誌のほかに、*The Yellow Book*, *The Savoy* などの所謂文学・芸術系リトル・マガジンが隆盛を極めたことはよく知られている。さらには *Century Guild Hobby Horse*, *Dial*, *Pageant*, *Dome*, *Bookman* などの雑誌も刊行された。ほかに、日刊紙、週刊誌、月刊誌、季刊誌が多数刊行されており、これらの多種多様なジャーナルは独自の編集理念を掲げて新しい読者獲得に鎬を削っていた。

Oscar Wilde (1854 - 1900) が編集主幹をつとめた女性月刊誌 *The Woman's World* は、これまでさほど真正面から研究の対象に取り上げられることはなかったが、彼の本誌編集活動(誌名変更の要請活動も含めて)の意義・役割をより広範なコンテキストに立って読み直そうとする動きが俄かに注目されるに至っている。すなわち文学的・文化的・社会的などといった複合的視点に基づいた多角的・総合的アプローチを引き寄せているのが現状と言えるだろう。

19 世紀末のイギリスにあって、唯美主義者 Oscar Wilde が当時のジャーナリズムによって作り出される大衆文化に接近しながらも、その通俗性・卑俗性に対して常に一定の距離を置か

* 本稿は、2007 年 12 月 15 日に慶應義塾大学で開催された日本ワイルド協会第 32 回大会における「シンポジウム」で行った発表に基づいている。

** 総合人間科学部 表現文化学科 教授

ざるを得なかった煩悶と苦渋に満ちたジレンマが浮き彫りにされてくる。Wildeにとって「唯美主義」と「ジャーナリズム」という相互に対立し合う二つの範疇の接点（関連性）とは果たして何であったのか。Wildeにおける「ジャーナル編集者と作家活動の両立の問題」への接近・考察は今日のWilde研究者の新しい動向であり、奥行きのある共通の課題となっていることは確かな事実である。

さて、Messrs. Cassell & CompanyがWildeに女性向けの月刊誌*The Lady's World*の立て直しのために編集主幹の就任を依頼したことは、Wildeにとっては「天来の福音」にも値することで、彼はこれを快諾し1887年6月に入社する。（年俸300ポントの賃金契約は、当時としてはきわめて低い額と考えられる。）Wildeがこの要請に応じた理由もさまざま考えられるが、まず、当時、一家の家長として増えた家族を養うに足る安定した収入を確保する必要があったことが挙げられる。彼は1884年にConstanceと結婚し、1885年6月に長男Cyrilが生まれ、翌1886年11月には次男Vyvyanが誕生する。これといった資産も無く、ほとんど無名であったWildeにとって、演劇関係などの評論集への書評や記事を書くことでようやく生計を立てていたのである。例えば*Dramatic Review*には5編の記事を（1885年－1886年）、*Pall Mall Gazette*には70～90編⁽¹⁾の記事を書いている（1885年－1887年）。後の*The Woman's World*の編集主幹、ジャーナリストへの準備の道程は既にこのようにして築き上げられていったと考えられる。言い換えれば、こうしたジャーナリズム世界での地道な活動は、後年、イギリス世紀末文学界を代表する作家として飛躍を遂げるWildeの能力と可能性を育てる源流となったと位置づけることができる。

さらに、もう一つの要因を考えることができる。Wildeは、当時、衣装、ファッション方面では革新的感覚と主張の持主であることが世に認められ始めていた。「婦人向け雑誌の刷新には欠かせない人材」というWildeに対する出版社側の評価とそれに基づく要請はWilde本人にとっても心地良く受容しやすいものであったとも考えられる。

本稿は「世紀末ジャーナリズム文化」と「唯美主義作家Oscar Wilde」の関連性という問題（課題）に接近しようとする一つの試みである。とりわけ、本稿の主なねらいは、（僅か2年間[1887年11月－1889年10月]という短期間であるにせよ）Wildeが*The Woman's World*の編集主幹として主張し続けた主題である「ジェンダー・イデオロギー解体への志向」について考察することである。言い換えれば、当時の女性の社会的地位向上や教育権の問題はもとより、あらゆる分野における男女平等の権利確立のポリシー、ひいては彼のフェミニズム論などを主たる観点としながら、彼の文学作品への投影についても論じてみたいと思う。

Ⅱ. 女性の役割とはなにか ―― 「ジェンダー・イデオロギー解体」のうねり ――

*The Woman's World*は女性の読者に向けた雑誌であった。内容的には当然、女性に関わる問題が中心となっている。女性の高等教育、女性の社会的地位向上や権利の獲得、女性の職業、働く女性の問題、海外の女性の話題の他に女性のファッション、服飾に関する歴史、針仕事、演劇などである。（ここには男性読者向けの雑誌にあるような、科学、哲学、政治経済、宗教などを扱う記事はほとんど見られない。）

ここで注目すべきことは、このような女性の文化（とりわけファッションや服飾などに関わるもの）を扱う記事には、女性の“gender robe”についての（編集の段階で交わされたであ

ろうとも想像できる）より深刻な議論が見え隠れする。とりわけファッションについての同誌の全体の主張は「女性の権利や自立のためには、まず衣服の改良が必要であり、女性の体を締めつけたり歪めたりする補助を否定し、自然な形態のドレスを考案していくことが望まれるべきである」というもので、これは本来の Wilde の意図とは微妙な差異を示すものである。確かに彼は「合理服」を賞揚してはいるが、それによって目差すものは「女性の解放」ではなく、単純に、女性の日常生活の能率性・利便性であったと考えられる。

1887年9月5日に Messrs. Cassell's & Company の経営者の一人 Wemyss Reid⁽²⁾ に宛てて書き送った「雑誌名変更要請」の主旨を述べる書簡のなかにも、Wilde の鮮明な編集理念を窺い知ることができる。

Dear Mr. Wemyss Reid, I am very anxious that you should make a final appeal to the Directors to alter the name of the magazine. I am to edit for them from *The Lady's World* to *The Woman's World*. The present name of the magazine has a certain taint of vulgarity about it, that will always militate against the success of the new issue, and is also extremely misleading. It is quite applicable to the magazine in its present state : it will not be applicable to a magazine that aims at being the organ of women of intellect, culture, and position.

(下線筆者) (*Letters*, p. 203)

Messrs. Cassell & Company から *The Lady's World* の立て直しを依頼されて、Wilde はまずこの雑誌が本来有すべき「ジェンダー・イデオロギー」を問題にしている。Wilde は、1887年4月、Wemyss Reid に宛てて次のような書簡を送っている。

It seems to me that at present it is too feminine, and not sufficiently womanly. ... *The Lady's World* should be made the recognized organ for the expression of women's opinions on all subjects of literature, art, and modern life, and yet it should be a magazine that men could read with pleasure, and consider it a privilege to contribute to.

(下線筆者) (*Letters*, pp. 194-95)

“being feminine”を謳う雑誌から“being womanly”をモットーとする雑誌へ。言い換えれば、「女性が身につけるもの」を中心にした雑誌から「女性がどう考え、どう感じ、またどう行動すべきか」を扱うような雑誌への転換。この斬新な転換の方向性を示すことによって、Wilde はイギリス 19 世紀末（ヴィクトリア時代末期）の既成の「封建的父権制」「男性優位の社会形成」に基づく因習的ジェンダー概念が求める「女らしさ」の崩壊をねらいとしたのである。女々（めめ）しく貞淑に男性に従属する女性ではなく、男性と対等の権利を大胆に主張できる「新しく生まれ変わった女性」という認識が構築されたのである。このような女性認識の種別化はすでに、男性についてもなされていた。「マスキュリニティー (masculinity)」という概念が「(この時代が求める) 本物の男性らしさ」を意味する言葉となっており、一方「マンリネス (manliness)」は通時的・生物学的な概念における「男性らしさ」として理解されていたのである。Wilde はここで「(封建的・因習的な) 男性らしさ」の概念との対極的な関わりの中で、当時代が求める「女性らしさ」を突き崩そうとしているのである。ここには、Wilde の「(男性をも凌駕するほどの) 確かな発言力を有した、社会的にも通用する、能力ある女性」の出現への期待と意欲と使命感が顕著に映し出されている。

1887年9月にLady Gregory⁽³⁾に宛てて書いた執筆依頼の書簡にもWildeの編集主幹としての確固たる編集理念と主張とを読み取ることができる。

I am anxious to make the magazine the recognized organ through which women of culture and position will express their views, and to which they will contribute.

(下線筆者) (*More Letters*, p. 69)

Wildeはここでも、女性が文学・芸術・現代生活に関して率直な意見を述べることのできる「認知機関」としての本誌が本来担うべき「ジェンダー・ポリシーの具現化」を明確に打ち出している。このような「女性の社会的地位向上」を主眼とする編集理念をめぐって、Wildeは同誌出版社経営陣との間で厳しい議論を交わしていたことを当時の副編集主幹Arthur Fish (1860 - 1940) が明確に証言している。⁽⁴⁾ さらに、「女性の高等教育への参与」に関わるWildeの基本的姿勢については、George Woodcockの指摘もまた的確である。彼によれば、*The Woman's World*の編集に当たってWildeは、終始、“the intellectual equality of women”という考えを<軸>にし、「女性が男性と同等に教育的職業に就業できる権利」が当然の権利として遍く認められるべきであると主張した彼の基本姿勢を鮮明に描き出している。

In editing *The Woman's World*, he spoke continually for the intellectual equality of women, remarking that: “The Apostle dictum, that women should not be suffered to teach, is no longer applicable to a society such as ours, with its solidarity of interests, its recognition of natural rights, and its universal education …” ⁽⁵⁾

G. Woodcockの上記の指摘はきわめて重要な意味をもっている。このような指摘の背景には、イギリス19世紀末における女性の高等教育機関に雇用される比率が余りにも低すぎたという歴史的事実が挙げられる。当時の「男性優位の思想」を基盤とする偏重した因習的教育体制に対して一石を投じたWildeの勇気ある一面を的確に捉えている。

Ⅲ. Wildeの攪乱 —— 高邁な理念と通俗的手法 ——

新刊の構想が成立した*The Woman's World*の寄稿依頼のためにWildeが書き送った書簡の数は60通を超える。それぞれの書簡の中に同誌編集・出版に向けての彼の編集理念とともに積極的な姿勢を窺い知ることができる。しかし、いずれの書簡の中味も良く言えば意欲的ではあるが、かなり慇懃で過度に形式ばった様相を呈している。何よりも、同誌の当初のモットーであったはずの「ジェンダー・イデオロギーの解体」「男女平等」「格差撤廃」とは逆行する彼の書簡様式に注目したい。以下に、詩人のHamilton King⁽⁶⁾に宛てた書簡(1887年9月1日付)を引用する。

Mr. Oscar Wilde presents his compliments to Mrs. Hamilton King, and would be very much gratified if Mrs. King would allow him to add her name to the list of contributors to an illustrated monthly magazine he has been asked to edit for Messrs. Cassell's & Co. the publishers.

Mr. Wilde is anxious to make the magazine the recognized organ through which women of culture and position will express their views, and to which they will contribute.

The Princess Christian has kindly promised to write, and so have Miss Thackeray, Mrs. Fawcett, Miss Olive Schreiner, Lady Portsmouth, Lady Zetland, Lady Meath, Mrs. Craik, Lady Archibald Campbell, Mrs. Pfeiffer, Lady Tweeddale, Miss Edith Simcox, and many others.

A short poem, or sonnet, from Mrs. King's pen would add a charm and distinction to the magazine, and Mr. Wilde ventures to hope that Mrs. King will send him something for one of the early numbers.

(*Letters*, p. 203)

確かにこの書簡の第2パラグラフでは、本誌編集の趣旨と理念が簡潔かつ鮮明に述べられているが、次のパラグラフでは、The Princess Christianをはじめ、“Lady”の称号をもつ多くの婦人の名前や著名人の名前を列挙しながら「だからあなたも寄稿してください」と言わんばかりの寄稿の勧誘を行っている。以前、例の「誌名変更」の際に *The Lady's World* を誹謗中傷した際に用いた常套語である「通俗的な格差主義」を、驚くべきことに、本誌編集初期の段階で Wilde 自らが行っているのである。早くも、ジャーナリスト Wilde の編集政策に一種の攪乱状況が見られるのは驚きに値する。

確かに *The Woman's World* は編集初期の時代から「女性の社会的地位向上」と「男性との平等性」をスローガンの両輪として揺るぎの無い発信を行っていた。その発信の仕方にはさまざまな工夫が施されることになる。一つには、匿名記事を掲載することを常としていた *The Woman's World* の編集方針を変えて、原則として記事に署名を入れるという方針を立てたことが挙げられる。しかし、この点についても、当時のジェンダー・イデオロギーが大きな障害となってくる。例えば、各号の *The Woman's World* の表紙や、一年分の合本用の目次においては、未婚か既婚かが判別できたり、夫の身分も分かるような表記の仕方であった。さらには、「目次」における執筆者名の表記と、「実際の記事」に付随して記される執筆者名が異なったりする例や、ペンネームによる執筆がなされる例などもあり混沌状態を呈している。このような彼の困惑した状態の原因として、家父長制のもとにおける＜膠着したジェンダー・イデオロギー＞が編集主幹 Wilde を強制的に統制する《ある種の権力》となっていたことを看過することはできない。

ただ、注目すべきことは、*The Woman's World* の編集主幹としての Wilde に託されていたはずの（編集総体に関わる）自由裁量権の幅が思うほどには許されていないという事実である。その辺の事情と Wilde の心境は、1887年10月の Helena Sickert⁽⁷⁾宛の書簡に記されている。ここで Wilde は、同誌への寄稿に謝意を述べながら、“I hope that it is not more than 4000 words, as I find that my space is limited.” (*Letters*, p. 207) と苦況を率直に伝えている。このような「執筆字数制限」という意外な縛りに Wilde は不満感を募らせるが、原因は、明らかに彼と Messrs. Cassell's & Company の経営陣との間に介在する溝が主な原因であったと考えられる。溝とは、雑誌編集の基調に関わる双方の見解・主張の食い違いである。Wilde は一貫して同雑誌の基調を「ジェンダー・イデオロギーの解体」「男女平等」「男女同権」に置き、「女性の社会的地位向上」の概念や意義はその基調の到達点として踏まえている。「女性の社会的地位向上」は当時のジャーナリズムにとっては世論に対して説得力のある発信標題であったことは確かなことである。

Ⅳ. Wilde の作品に投影された「ジェンダー・イデオロギー解体」の視点

ジャーナリスト時代の Wilde は、90 年代に入ってイギリス 19 世紀末を代表する文学者としての鮮やかな脱皮を遂げる時に備えて、言わば作家としての修業生活をおくり、確かな実力を身につける文学活動に勤しんでいたと言える。

例えば、批評論集『意向集』(*Intentions*, 1891) に収められている 4 篇の随筆のうち、‘Shakespeare and Stage Costume’ (後に ‘The Truth of Masks’ と改題) は 1885 年 *The Nineteenth Century* に、‘Pen, Pencil, and Poison’ は 1889 年 *The Fortnightly Review* に、‘The Decay of Lying’ は 1889 年 *The Nineteenth Century* にそれぞれ発表されていた。‘The Critic as Artist’ も 1890 年 *The Nineteenth Century* に発表されている。また、ほかにも、短篇小説 ‘Lord Arthur Savile’s Crime’ が 1887 年 *The Court and Society Review* に、同様に ‘The Portrait of Mr. W.H.’ が 1889 年 *Blackwood’s Edinburgh Magazine* に発表されるなど、Wilde の注目に値する作品は、このジャーナリスト時代にすでに着実に産み出されていたのである。

確かに 90 年代前半における Wilde の活動は華麗とも言えるものであった。長編小説 *The Picture of Dorian Gray*、批評論集『意向集』、短篇集 *Lord Arthur Savile’s Crime and Other Stories*、童話集 *A House of Pomegranate* が 1891 年に出版された。同年、論文 *The Soul of Man under Socialism* を刊行。これにつづいて風習喜劇が連続的に発表され、劇場では大当たりであった。(ここで注目しておかなければならないのは、こうした Wilde の活躍の予兆は、すでに 80 年代の後半において窺えるものであったという事実である。例えば、世の注目を浴びた長編小説 *The Picture of Dorian Gray* などは、1890 年 *Lippincott’s Monthly Magazine* に掲載されている。)

Wilde のジャーナリスト時代の最大のモットーであった「ジェンダー・イデオロギーの解体」の視点がこれらの彼の作品にどのように投影されたのだろうか。総じて言うならば、この視点は彼のすべての文学的作品の底流を貫くものであることは確かなことである。この主題は、単に「女性の権利の回復・保障」とか「フェミニズム」の主張のレベルに留まらず、ひろく「弱者への配慮」、「貧困からの解放」さらには「自己犠牲と自己実現」というように (ジャーナリスト時代の) 彼の当初のモットーを拡大し、普遍化している。

この視点が最も“劇的に”映し出されるのは、彼の風習喜劇 *A Woman of No Importance* (1893 年 4 月 19 日初演) においてである。この風習喜劇に登場する 18 歳の麗しいアメリカ人女性 Miss Hester Worslye の存在に注目したい。本風習喜劇の主人公はダンディーな個人主義者 Lord Illingworth で常に世紀末的頹廢の香りを漂わせている。彼には苦々しい「過去」がある。若い頃に、ある女性と恋に落ち、彼女を勝手気ままに玩んだ挙げ句、捨ててしまう。彼女の名は、今は、Mrs. Arbuthnot といい、犠牲者、過去を背負った女性として、二人の間に生れた息子 Gerald を女手一つでひっそりと育てている。Hester はアメリカの富豪の遺児で「女性の天国」アメリカからイギリスの田舎の社交界に招かれて来ており、Gerald とは恋人同士という設定である。「世紀末」という同時代とともに生きる Mrs. Arbuthnot と Hester の共通の特徴は、それぞれの台詞に頻出する simple, pure, purity, good などの言語表現で表わされる「清楚、純潔、善良」をモットーとする内面的に豊かな生き方ではあるが、ともすれば、これは<悪しき外敵>に対しては敢然と闘うという強固な姿勢を併せもっている。「清潔」と「勸善懲惡」——これら両面の特性は当時の清教徒が等しく有する特徴的な品性を示すものとも言えるだろ

う。当然のことながら、「純潔」を核とする清教徒の品性は、低俗な Lord Illingworth のダンディズムとは対極的な位置にある。

世紀末特有の因習的な道德観念に拘束され、内側に籠って、苦難に耐えて生きる Arbuthnot の清教徒的な生き形は、Hester という大胆で勇気ある「新大陸型の清教徒」にとっては格好の攻撃の標的となる。Hester は、“If a man and woman have sinned, let the both go forth into the desert to love or loath each other there. …Don’t have one law for men and another for women. …You are unjust to women in England.” (Act. 2. p. 435) と貴族界の一角をなす Lady Hunstanton に向かって叫ぶ。ここには、確かに、「新しい女性 (new woman)」としての姿が鮮やかに描き出される。このような勇猛とも思える Hester の姿の片鱗は、Wilde の短篇小説 *The Canterville* (1887 年発表) に登場するイギリス駐在アメリカ公使 Mr. Otis の娘 Virginia にも見受けられる。

確かに、(Wilde が作品に登場させた) これらのアメリカ型清教徒たちは、皮肉にも、イギリス 19 世紀末の価値観・道德観の弱点を突きながら、声高らかに「理想的フェミニズム」を唱導したのである。

VI. おわりに

Wilde は、*The Woman’s World* の編集には、創刊号から第 24 号 (1887 年 11 月～1889 年 10 月) までの 2 年間にわたって携わった。各号の表紙には決まって編集主幹 “Oscar Wilde” の名前が刻印された。

Wilde の実人生が如実に示すように、この「ジャーナリズム経験」は、不本意ながら、妻子を養う収入源を得るためであったとされ、彼がジャーナリストとして生計を立てていた時代の単なるエピソードとして批評家からは長らく看過されてきたのである。しかし今日、Wilde をめぐる新しい批評の視点に上って見直されるようになっていく。すなわち、ジャーナリズム世界に身を投じた経験があればこそ、彼は世紀末を代表する作家として成長 (成熟) できたというような半ば逆説的理解が可能ともなるからである。

とは言え、事実、Wilde は編集主幹時代の最終期になると同誌への情熱を失ってしまい、その結果、その座を降りてしまう。彼の辞職の詳細な理由については、今後の研究者による考察・接近を待たなければならないが、一つ言えることは、当時のイギリスの世論は、唯美主義に立った文芸活動を束縛し、同時にジャーナリズムにもそのような制約と誘導とを行ったという歴史的事実である。その結果、ジャーナリズムは唯美主義文学 (或いはそれに類するもの) の成果を「商品」という醜悪な形に変貌させるという厳しい経路を辿らざるを得なかったのである。言い換えれば、それは「文学の商業化の傾向」であり、消費の対象になり得るものだけが価値を有するという固定概念ですべてのものを括りつける「商業重視」「消費優先」の思想である。それは文学にとってもジャーナリズムにとっても不快な障壁である。文学にもジャーナリズムにも共通に言えることであるが、「商品」にならない類の文学作品は無視され、やがては消滅させられる。その意味では、当時の退廃的な唯美主義的文学作品などは「商業化の傾向」の格好の攻撃の標的になったのである。いつの世も「商業化の傾向」の概念は「社会が必要とする、あるいは個人が生きてゆく上で必要な考えを与え得る現実主義的傾向」のそれと癒着するのが常である。ある意味では、このような「世紀末」という変動に富む時代の潮流の中であって、

“Wilde”自身が「商品」であったとも言えるだろう。百合の花を手にして、唯美主義的な服装に身を包んだ Wilde は、確かに、男性像の既成的規範から逸れていたがゆえに「女性にうける商品」になり得たし、唯美主義者とジャーナリストの二つの面を併せもつ Wilde もまた「魅力的な商品」であったのである。

イギリス 19 世紀末に生きた Oscar Wilde について注目すべき《価値》は、「高踏な唯美主義」と「低俗な世紀末ジャーナリズム文化」という両極にある芸術的領域の狭間で苦悩しながらその接点を求め続けたという確かな事実にある。さらに言えば、少なくとも Wilde にあっては、この二つの対極的世界を弁証法的に融合する一つのキー・ワードは「ジェンダー・イデオロギーの解体」であり、苦悶に満ちた紆余曲折を経ながらも、Wilde は却ってこれを基本的編集理念として巧みに活かし、唯美主義文学者としての自己確立への道を築いたのである。

【付記】

- テキストは、Maine, G.E. ed. *The Works of Oscar Wilde*. London & Glasgow: Collins Clear Type Press, 1961 を使用した。
- 本論文中各所に示される【*Letters*】の表記は、【Hart-Davis, Rupert ed. *The Letters of Oscar Wilde*. London: Rupert Hart-Davis Ltd., 1962】を短縮・省略したものである。また【*More Letters*】は、【Hart-Davis, Rupert ed. *More Letters of Oscar Wilde*. London: John Murray Ltd., 1985】を短縮・省略した表記である。

【註】

1. Pall Mall Gazette への Wilde の寄稿数が「70 ～ 90 編」と曖昧なのは、当時、同誌における記事が匿名で執筆されていたことによる。
2. Thomas Wemyss Reid (1842-1905), journalist and biographer, was the general manager of Cassell's Publishing firm. (*Letters*, p.194)
3. Isabella Augusta Persse (1852-1932) married (1880) Sir William Gregory (1811-1892), who had been Governor of Ceylon 1871-1877. She later published books of Irish legends and many plays. ... She published no book before 1894 and did not contribute to *The Woman's World*. (*More Letters*, p.69)
4. Fish, Arthur. "Memories of Oscar Wilde", Mikhail, E. H. ed. *Oscar Wilde: Interviews & Recollections*, London: Macmillan, 1979, pp. 153-54.
5. Woodcock, George. *Oscar Wilde: The Double Image*. Montreal · New York: Black Rose Books, 1989, p. 150.
6. Harriet Eleanor Baillie Hamilton (1840-1920), poet and author, married (1863) the publisher Henry Samuel King, (*Letters*, p. 203)
7. Helena Maria Sickert (1864-1939), writer, lecturer and untiring advocate of women's rights. (*Letters*, p. 60)

【参考文献】

- Bird, Alan. *The Plays of Oscar Wilde*. London: Vision Press Ltd., 1977.
- Brake, Laurel. *Subjugated Knowledges: Journalism, Gender, & Literature in the Nineteenth Century*. New York: New York Univ. Press, 1994.
- Cohen, Phillip K. *The Moral Vision of Oscar Wilde*. London: Associated Univ. Presses, 1978.
- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. London: Hamish Hamilton, 1987.
- Ericksen, Donald H. *Oscar Wilde*. Boston: Twayne Publishers, 1977.
- Gagnier, Regenia. *Idylls of the Marketplace: Oscar Wilde and the Victorian Public*. Stanford: Stanford Univ. Press, 1986.
- Hyde, H. Montgomery. *Oscar Wilde*. New York: Da Carpo Press, Inc., 1975.
- Kohl, Norbert. *Oscar Wilde: The Works of a Conformist Rebel*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1986.

梅津：Oscar Wilde とジャーナリズム

McKena, Neil. *The Secret Life of Oscar Wilde*. New York : A Member of the Perseus Group, 2005.

Raby, Peter. *Oscar Wilde*. New Rochelle : Cambridge Univ. Press, 1988.

角田信恵, 「オスカー・ワイルドと『女の世界』と女の世界」(『*The Woman's World* 別冊解説』)、東京：(株)アテナ・プレス、2008.

Worth, Katharine. *Oscar Wilde*. London : Macmillan, 1983.

